

## 芥川龍之介の童話「杜子春」

## ——鉄冠子と〈影〉——

山脇 佳奈

## はじめに

「杜子春」(大正九年)は、児童文学雑誌『赤い鳥』に発表された芥川の童話第四作にあたる。第一作は創刊号に掲載された『蜘蛛の糸』(大正七年)であり、以後「犬と笛」(大正八年)、「魔術」(大正九年)、「杜子春」を経て「アケニの神」(大正一〇年)へと続く。そして、発表後は「蜘蛛の糸」と並行して高い評価をえることとなる。近年では、関口安義<sup>〔注〕</sup>が『杜子春』は『蜘蛛の糸』『白』と並んで、これまで広く読まれ、龍之介童話のベストスリーの一つに数え上げてよいものである」と、作品の知名度の高さも併せて指摘している。こうした先行研究から明白なように、「杜子春」が『赤い鳥』に掲載された芥川の童話五作品のなかでも作品の内容、完成度などがいかに優れ、評価できる作品であるかという事実は認められるであろう。

一方、こうした評価の高さに相まって、「杜子春」にはこれまで次のような前向きな読みが与えられてきたことも、また事実である。まず

吉田精一<sup>〔注〕</sup>は、「杜子春」の原典として定説化している李復言もしくは鄭還古作『杜子春伝』との比較を前提として「平凡な人情、通俗的な道徳を肯定しているようだが、そこには原作にない、この童話の倫理的な美しさがある」と記す。『杜子春伝』における仙人に失格の宣告をされ、落胆して帰宅するも、今一度仙人を訪ねずにはいられなかった杜子春は、仙人の恩に報いることができなかつた。その嘆きが原作の結末には漂う。だが芥川の『杜子春』では、杜子春の落第をかえって幸運と位置づけ「平凡な人情、通俗的な道徳を肯定」することによって、作品には「倫理的な美しさ」が生まれていると吉田は読む。

また前述の関口は、別論文<sup>〔注〕</sup>において「杜子春」の作品像を総じて「人間らしい正直な生き方の大切さを説いた、結末の明るい、ほのぼのとした作品である」と評し、物語から明るさや温かな情感を読み取っている。こうして、物語の無毒性、更生の可能性を秘めた「杜子春」は子どもを教え導く国語科教材にまでなった<sup>〔注〕</sup>。こうした教材化もあって、「杜子春」はますます子どもに与えられるにふさわしい「美しく「明るい」物語であるという評価を獲得している。したがっ

て、具体的な数量として示すのは不可能ではあるが、「杜子春」をいわゆるいい話としてみる論の方が多いのが実状であろう。

しかし、このように半ば定型化してしまった読みに果敢に対抗する論もある。例えば頓野綾子<sup>註5</sup>は、その定型化の原因を「童話というジャンル、とりわけ『赤い鳥』という雑誌の性質を前提としている可能性である。比較的教訓性を持ちやすいこと、広い意味での教育性を担っている場合が多いこと、といった童話の性質に、『杜子春』を明らな物語と読まされている可能性があるのではないかと推測し、また『読まされている』実態を特に「杜子春」の作品内容から立証して、こう結論づけている。

「杜子春」という作品だけを読んでもみると、「杜子春」は純粹で明らな物語である、とは単純に言えない点が数多く出てきてしまうのである。にもかかわらず依然として「杜子春」の評価は「人間性回復の物語」という評価を与えられているのだ。これはやはり大正期の童心主義的児童文学の在りかた、その頭目ともされた〈赤い鳥〉的なイメージが重ね合わせられているからだ、と言わざるを得ない。

芥川の「杜子春」は、頓野が述べている通り、作品単体でみると決して吉田のいう「美し」さも関口のいう「明る」さも見当たらないのである。物語の結末は、むしろとても暗い後日談すら想像しうるものであって、頓野の評言には大きく賛同したい。

では、なぜ物語が「明るい、ほのぼのとした作品」と読まれてしま

うのか。それは、頓野が指摘する児童文学雑誌であった『赤い鳥』の性質の問題の他に、物語へ立ち返って一見すると仙人鉄冠子が杜子春に救いの手を差し伸べて、それを契機に杜子春が更生していくように読めるからであろう。だが、本当に鉄冠子は杜子春に手を差し伸べたのだろうか。「杜子春」の読みがこうした方向に落ち着くことが、私には疑問である。なぜそのような疑問が浮上するのかといえば、鉄冠子の善心の存在を疑わずにはおけない矛盾が、鉄冠子の言動をめぐる表現に溢れているためである。私と同じく「杜子春」を暗い方向で読み解く頓野は「杜子春が・筆者注」鉄冠子に誘導される形で得たものは肉親に対する、という限定付きの『人間愛』である」として杜子春を中心に論を展開している。しかし、「杜子春」を決して更生物語とは読めない元凶は、杜子春を導いた鉄冠子であるはずで、鉄冠子に詳細な考察が加えられてもよいのではないかと。また、鉄冠子に重点を置き「杜子春」を批判的に読む論<sup>註6</sup>も存在するが、それには未だ追究の余地が残されているように思える。その具体的な論述は「三」で行う。

本稿は、その矛盾点を順に整理しながら、なぜ鉄冠子がそうした矛盾する言動を取ったのかという鉄冠子の動機検討と、「杜子春」の新たな読みの可能性を示すことを目的とする。

## 一 鉄冠子の弟子取り

この「一」では、鉄冠子がなぜ物語中で矛盾した言動を取っている

のか、その動機を探るために、鉄冠子の感情が読み取れる場面を洗い出す。

まず、先ほどから存在を予告している鉄冠子の矛盾を提示しておきたい。それは次に挙げる二箇所の鉄冠子の言葉である。

① 「もしお前が黙つてゐたら——」と鉄冠子は急に厳な顔になつて、ちつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。(中略)」

② 「(中略)たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覚悟をしろ。(中略)」

①の鉄冠子の言葉は、仙人の弟子になりたがつた杜子春を地獄から引き戻して告げた、鉄冠子が弟子に行く予定であつた仕打ちを示している。それに対して②の言葉は、杜子春を自分の住処である峨眉山まで連れて行つたうえで鉄冠子がした警告である。この②における警告を杜子春は峨眉山では守り通した。けれども、地獄に落ちてから鞭打たれる母親の哀れな姿を目にしては、それも不可能だつた。杜子春は「お母さん」と叫んでしまうのである。そのため、杜子春は弟子を落第し、現実世界に戻つて来て物語は結末を迎える。このストーリー展開だけを眺めていれば、杜子春に与えられた結果は至極当然の帰結といえるだろう。だが①の場面を考慮すれば、そうともいつてはいられないことに気づく。①のいう通りに杜子春が行動するならば、それはす

なわち②の警告違反を示す。ようは、杜子春に仙人になる道など初めから準備されていなかったのである。黙つていれば殺されて仙人にされないし、かといって喋つてしまえば警告違反になって鉄冠子に見捨てられてしまう。

これら二種の言葉から生じる矛盾をいかに理解すべきだろうか。いずれの道を選択しても、仙人になれるかなれないかという見地からいけば、結論は一種しかないのだ。こうした矛盾が発見されては、鉄冠子に、まず杜子春を仙人にしてやる気があつたのかどうかという点が疑問視される。さらにいうならば、いずれを選んでもひとつの結末しか準備されていなかったのなら、それこそが鉄冠子の真意であつたといつてしまつてもよいのではないだろうか。しかもそれが落第という結末だつたのであれば、鉄冠子には杜子春を仙人にする気など初めからさらさらなままに、偽りの言葉を並べ立てていただけだと考えられるであろう。偽りを平然と述べていた鉄冠子から、杜子春への親切心など良心的な感情を読み取ることは難しいといわざるをえない。

また①にみられる「思つてゐた」という表現からは、過去の時点で杜子春が苦境に立たされることを予見したうえで、予定を立てていた鉄冠子の姿が浮かび上がってくる。峨眉山は鉄冠子の住処であつたから、そこに杜子春を連れて行けば杜子春がどんな目に遭うのか、鉄冠子には容易に想像できたのであろう。こうした地下工作の存在からも、鉄冠子の杜子春に何としても声を出させようとする意志は伝わりこそすれ、及第する道を残すなど、杜子春に対する思いやりは伝わつては

こない。

これら仙人への弟子入り事件を通してみえてくる鉄冠子の矛盾のほかに、鉄冠子が杜子春に抱いている感情が明らかになっている場面は数多い。それには、鉄冠子が杜子春の目の前でみせる表情がある。鉄冠子が偽りをいい出す発端となった杜子春の施し拒否の場面で、鉄冠子は次に挙げるような表情をみせている。

① 「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？ ははあ、では贅沢するにはとうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人は審しさうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。

② 「人間は皆薄情です。(中略) そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑ひ出しました。

③ 「それも今の私には出来ません。(中略)」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙つて、何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、

これらの場面は、杜子春が鉄冠子からの三度目の施しを断り弟子にしてくれと頼むまでの、鉄冠子の表情など、様子が分かる部分である。まず①の場面では、鉄冠子は「審しさうな眼つき」をみせている。「審し」は正しくは「訝し」であり、その意味は「疑わしい」<sup>(注)</sup>と

いうことである。つまり、鉄冠子は「贅沢するにはとうとう飽きてしまつたと見えるな」といいながら、実は全く逆で、金はいらぬだろうし、杜子春は贅沢に飽きていないだろうとも考えていることが分かるのである。

次に、②の場面において鉄冠子がみせた表情は「にやにや笑ひ出し」という笑顔であった。「にやにや」の意味は、「ばかにしたように、声を出さず薄笑いするさま」<sup>(注)</sup>とされる。そもそも、鉄冠子がこうした意味を持つ笑いをみせたのは、杜子春の言葉がきっかけであった。鉄冠子にとつて「人間は皆薄情です」との杜子春の言葉は、おもしろかったり、変なものであったりして急に笑いを誘うものだったのであろう。金は際限なくいるし、贅沢をしなくてはやっていけない人間とも疑つてみている杜子春が「たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです」ということが、鉄冠子には馬鹿馬鹿しくて笑つてしまうようなことだったのである。ゆえに、「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ」といった言葉も、鉄冠子の本心からの言葉でないことが分かる。また、口先だけでそういつているのだ。むしろ鉄冠子の杜子春に対する評は、この逆なのである。つまり、杜子春のことを贅沢を好んではばかりの感心しない男だと捉えているのである。

続く③の場面では、鉄冠子は少し難しい表情をみせている。しかし、そのうちに「につこり」笑う。「につこり」は「にこり」ともいい、意味は「にこやかにほほえむさま」<sup>(注)</sup>である。同じ笑う表情でも「に

やにや」とは違つて嫌な印象はない。けれども、ここではまず、「何事か考へてゐる」という表現に注意したい。鉄冠子は弟子にするという許可を瞬時に出したわけではないのである。何らかの迷ひ、思いがあつたからこそ少し間を取つてゐるのである。ここで鉄冠子は何を考へていたのであるか。これは、その後の鉄冠子の行動から逆に考へてくれば、推測することができる。

杜子春に弟子にしてくれと頼まれた鉄冠子は、これに答える形で弟子にすることを承諾した。しかし、先ほど明らかにしたように、鉄冠子には杜子春を弟子にする気などないわけであるから、この返答にはするつもりもないことをすると偽る嘘が含まれてゐることになる。嘘までついで、鉄冠子は杜子春を峨眉山に連れて行くのである。そこには相当の理由があるに違ひない。その理由は物語のなかで次第に明かされていく。つまり杜子春に魔性のものをみせ、閻魔王をみせ、母親の姿をみせる。これら鉄冠子の一連の行為が、鉄冠子が峨眉山へ杜子春を連れて行つた理由であつた。したがつて、鉄冠子が「眉をひそめ」て考へているのは、杜子春をどのような目に遭わせることが可能か、といった今後の予定であると思われる。そしてここでの思案が、杜子春の絶命を企んでいたことを明かした際に出た「思つてゐた」という鉄冠子の言葉に、繋がつてゆくのだ。

さて、鉄冠子はここまで述べてきたような順序で、ついに「眉をひそめた儘」杜子春を苦境に立たせうる数々の案を考えつく。そして、それを思ひついたから「につこり」笑つたのである。この笑ひは、辞

書通りに取るとそう悪いものでもないようにみえる。しかし、言葉から裏の心理を読むと、むしろ「にやにや」と同様の他人と馬鹿にするといった感情が流れてゐるといえるであろう。

以上「一」では、鉄冠子の矛盾した行動を経て弟子取りについての三場面から、鉄冠子が杜子春のことを言葉とは裏腹に、贅沢を好んでばかりの感心しない人間だと捉えていることが分かつた。さらに、鉄冠子は贅沢をして生きていくことには感心しないのだから、杜子春への三度の施しも、純粹な哀れみからの行動ではないことが分かる。つまり、鉄冠子の行動は、杜子春に対するボランティア的精神から起こされたものではなく、他の感情によつて生み出されてゐると推測されるのである。

## 二 隠された鉄冠子の真意

では、結局、鉄冠子はなぜ三度にも渡る援助を行つたのだろうか。この「二」にてその理由を探つていくために、まず物語の最後の場面を次に引用する。

物語の最後になつて地獄より舞い戻つた杜子春は、金に埋もれるでもなく、仙人になるでもなく、「人間らしい」生活を送ることを決心する。贅沢をすることを感心しない鉄冠子も、これで満足だろう。現に鉄冠子は、その満足感を思わせる言葉を発している。「その言葉を忘れなよ」がそれである。

「お、幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、(中略)」と、さも愉快さうにつけ加へました。

しかし、鉄冠子はずいぶん直後に、右のようにいいながら新たな財産ともなりうる家と畑を杜子春に与える。もし、杜子春がこの家と畑を受け取ってしまったら、またも鉄冠子の感心しない財産に埋もれ贅沢をする人間に逆戻りとなつてしまふ。また、鉄冠子の目的が杜子春に「人間らしい」生活をさせることであつたがゆえに、これまでの援助が存在しているとしても、この一言によつて、すべては台無しになつてしまふ可能性があるのである。「人間らしい」生活も営めなくなつてしまふかもしれない。過去二度の施しを活かすことなくただ使い切つた杜子春に何かを与える行動は、好転した状況を一瞬にして水泡に帰す危険性をはらんでいる。

ここで、鉄冠子の最後の施しについて言及した論に目を向けてみたい。張蓄(註四)は次のように述べている。

仙人鉄冠子は(中略)子春の新しい人生のスタートを祝福し泰山の南の麓にある畑つきの一軒の家を彼に与える約束をする。かつての財産と比べものにならないが、精神的な支えを得た子春にとつてはこの上もないプレゼントであるに違いない。

このように、張は、「杜子春」の結末を明るいものであると捉え、また杜子春は母親の愛によつて更生したと考えている。

しかし、もし杜子春が母親の愛によつて更生を果たし、「人間らし

い」生活を送ることになり、それを真実鉄冠子が祝福しているのならば、この家と畑は贈られることはないように思う。本当に杜子春を祝福するのなら、贅沢を好まぬ鉄冠子は杜子春を着のまま洛陽に放り出すのではなからうか。なぜなら、「お金はもう入らないのです」とこれまでの金の施しを拒否した経験を持つ人間に、家と畑は無用と思われるためである。必ずしも家と畑である必要はない。それが何であつても、他力本願な贈与関係を清算したようにみえる人間の杜子春にものを与えることは、杜子春の現状と齟齬をきたしているといえよう。家と畑は、更生したことへの祝福という意味での「プレゼント」にはならないのである。

南條竹則(註五)は、こうした両者の贈与関係から鉄冠子を原典「杜子春伝」に登場する仙人と比較し、次のように述べている。

両者を較べた時、芥川のヴァーシヨ(註六)ンに一つ致命的な欠点がある。／ 仙人の行動に動機が欠けていることだ。／ 中国版の仙人は、杜子春を煉丹術に利用するという明確な目的を持っている。だからかれに近づくのだ。／ しかし、芥川の鉄冠子は？／ こちらの杜子春は欲深で、だらしくなくて、あまつさえ意志も薄弱な、甘つたれた凡人ではないか。仙人がそんなものを相手にするものか！(中略)仙人はそれほどヒマでない(中略)見どころのある人間を濟度するというならとも角、世の中にクサルほどいるろくでなしの面倒なんか見ている余裕は、ない！

「杜子春」のなかで、鉄冠子の意図が明確でないのに対しこのよう



に冷たく批判している。確かに、一見杜子春に近づいたところで、鉄冠子には何の益もないかのようにみえる。鉄冠子に益が見出せない限り、杜子春への度重なる施しは、鉄冠子による慈善活動になる。

だが、鉄冠子がそんな活動をするような人物でないことは、「一」で確認済みである。南條の論は、仙人が益なく行動することはありえない、つまり鉄冠子が善人にはなりえないことを指摘したものと見え、非常に興味深いものである。また南條は「杜子春」全体を「不良青年更生」話と評すものの、どんな青二才でも救われるのであれば、その話を読む子どもの教育に悪い、とも述べる。更生という言葉がもたらす安心感に惑わされず、物語の綻びを見逃さない姿勢は、むしろ「はじめに」において提示した、物語に明るさを見出すことへ警鐘を鳴らした頓野論に近い。しかし、「仙人の行動に動機が欠けている」という問題提起のみで、そこから逆に考えうるであろう、ではなぜ動機がないのかまたは本当に動機がないといえるのかといった疑問などは何ら解決がされておらず、中途半端な観がある。

ここで、私は、鉄冠子の目的がむしろ先述した張の意見とは逆のものなのではないかと考えたい。つまり、鉄冠子の施しには自分が感心しない人間である杜子春を、さらに感心しない人間にするという目的があったということだ。しかも、本文中の「愉快さうに」という言葉から考えると、その行動はさして真剣味を伴わず、鉄冠子の遊び感覚で行われていると捉えられる。

鉄冠子の動機という点に着目した指摘には、小路口聡<sup>注12</sup>にも次の

ような意見がみられる。

こうは読めないだろうか。すなわち、全ては、凡人の論理を超越した仙人の聖なる「遊び」「戯れ」「気まぐれ」以外の何ものでもなかった、と。(中略) 杜子春は、この仙人に、いのように踊らされていた操り人形にすぎなかったのかもしれない。そもそも、「動機」などという、人間くさい行動心理学で、仙人が、行動しているわけははないのである。

小路口はこのように動機を見出そうとすることを、的はずれなことと位置づける。仙人が本当に存在するかどうかはともかくとして、「杜子春」のなかでも分かるように、仙術を用いる仙人は明らかに人間ならざるものであるといえよう。ゆえに、人間の考え方でこの存在を捉えようとするのが、すでに間違っているのかもしれない。小路口の指摘にも一理ある部分がある。

私は、先に鉄冠子の行動は遊び感覚で行われている、と述べた。この点は、小路口と非常に似ているといえる。私が遊び感覚とする根拠は、「愉快さうに」という本文中の表現にあるのだが、小路口も、論を次のように続けている。

そう思っ、あらためて、『杜子春』の結末を見ると、あの「……さも愉快さうにつけ加へました」という一節が、非常に意味ありげに浮かび上がってくるのではなからうか。

右のように、その根拠も「愉快さうに」という言葉に注目するといふ点で同じである。しかし小路口が、「杜子春」発表当時の、大正期の

母親が家事と育児とを兼任し遂行した「近代の家族制」の考え方に基づいて、杜子春は母性愛に導かれ「小市民的な幸福を選び」取ったのだとして、結局は「杜子春」を更生物語とみている、その論展開の根本とは意見を異にする強くいつておかねばならない。

また、「動機」などという、人間くさい行動心理学で、仙人が、行動しているわけではないのである」とあるが、「遊び」にしても「戯れ」にしても「気まぐれ」にしても、例えば、遊びたいという欲求があつて杜子春に働きかけるのであれば、「遊び」は立派な「動機」である。杜子春をどうにかすることによつて、鉄冠子は、この三つのうちのどれかを達成することができるのだ。ゆえに「動機」はきつちりあるわけである。鉄冠子には凡人に理解できない仙人特有の「動機」、思惑があり、それが遊び感覚の行動となつて現れているのだといえよう。

さて、先ほどから繰り返しているが、なぜ鉄冠子の行動が遊び感覚の行動といえるのかというと、「人間らしい」生活を決心し、新しく生まれ変わったともいえる杜子春に対して、「さも愉快さうに」家と畑を与えることを伝えて水を差すからである。更生をしたらしい人間に不要なものを送っていることから、むしろ鉄冠子は杜子春の更生を疑っているために、決心を口にした杜子春を邪魔することで「愉快」な気持ちになるのではないか。そもそも、感心しない杜子春が「人間は皆薄情です」ともつともらしいことをいったのも、鉄冠子には思わず笑つてしまうようなことであつたし、杜子春を地獄へと連れて行つて苦境に立たせることも、鉄冠子にとつては笑いの対象であつたといえよ

う。つまり杜子春が墮落し、苦しむことが、鉄冠子の「愉快」な気持ち満足させるのである。

ようするに、鉄冠子の「遊び」の心は、「愉快さうに」という表現だけではなく、それまでに出てきたさまざまな表情の裏にも隠れているのである。このような状況から、果たして杜子春は無事更生できるのだろうか。

鉄冠子の一見慈善活動にもみえる杜子春への援助行動の動機は、「愉快さうに」という言葉がその実状を一番顕著に示している。「はじめに」にて触れていた、慈善活動の一環ともいえる杜子春の苦境に際して、鉄冠子の矛盾する言動に隠された動機への疑問も、これで判然としはしまいか。鉄冠子は、ただ遊びたいから杜子春に手を出したに過ぎないのだ。鉄冠子にとつて、杜子春の改心は二の次なのかもしれない。自分の遊びのなかで改心すればそれもよし、しなければしない。自分の玩具にして遊び続けるだけなのである。ただし強いていうなら、楽しみのためには改心せず墮落し続けた方がいいのだろう。だから「愉快さうに」邪魔をする。だが、一口に「遊び」といつても何だか漠然としている。ここでは、その「遊び」を強者の余裕とでもいつておきたい。杜子春が更生するかしないか、そういった賭けに伴う緊張感を除いておきたいのである。なぜなら、絶対の成功を狙う必要性は鉄冠子にはないからである。仙術を身につけ、不老不死の身体を持ったものに叶わないことはない。そこをあえて賭けているのであるから、これは強者の余裕としかいいようがない。賭けに勝とうが負けよ



うが成功しようがしまいが関係なく、結果はどうあれ片手間に人間を操ってみせるのが仙人の特権であり、仙人独特の行動なのだろう。

以上、「二」では鉄冠子が杜子春を弟子にする気がないのに請け負ったり、純粹に救ってやる気もないのに救済行為をしたりしている真意を考察した。その考察の手がかりとなったのは、作中の「愉快さうに」という表現であった。贅沢に感心しない鉄冠子が最後まで杜子春への援助を止めなかったのは、自分自身の楽しみを長引かせるために、杜子春の墮落を鉄冠子が望んでいるからであろう。そして、その願望達成への楽しみが「愉快さうに」という表現になって表れているのではないだろうか。

### 三 〈影〉と仙術

ここまで、二章を要して鉄冠子が自分の「遊び」のために杜子春に援助の働きかけを行い、杜子春の墮落していく姿をみて楽しんでいる実態を明らかにしてきた。

では続いて、鉄冠子とその自分の楽しみのために、杜子春を手玉に取って気に入らない人間へ墮落させていると読めるその様子を、象徴的に表していると思われる部分から考察してゆきたい。次の三場面をみれば、杜子春が鉄冠子の援助を受け入れるごとにいかに墮落しているかが分かるのではあるまいか。物語の中盤、終盤から読み取れる鉄冠子の杜子春への思いを押さえて初めて理解できる伏線ともい

うべき意味深な表現が、物語の序盤より順に鉄冠子には付されていると考えられるのである。

- ① 「〔中略〕今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。〔中略〕」
- ② 「〔中略〕今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。〔中略〕」
- ③ 「〔中略〕今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。〔中略〕」(傍点筆者)

ここで注目したいのは、本文それぞれにみられる、大金の埋まっている場所である。①では「頭」、②では「胸」、そして③では「腹」。場所は、身体の上から下部へと移動している。

鉄冠子は、自分の愉快な気持ちを満たすのに、仙術を用いて杜子春に大金を与え、二度の墮落をさせた。ただ三度目は失敗するけれども、杜子春を苦境に立たせる別の案を思いついた。引用部は、こうした鉄冠子の企みが、実際の行動に移される瞬間である。

それに対して、杜子春は先の三箇所のうち二箇所を鉄冠子に勧められるまま掘って、大金をえる。しかし繰り返すが、この幸運は自分自身の墮落へと繋がっている。つまり杜子春は、知らぬうちに自ら更生への道より背いていくのだ。

このような企みが潜んでいる三箇所場について、それぞれの器官の役目を考えてみると、外部の事象を交えて客観的、理性的判断を下

す頭、主観的思いを感じる心のある胸、人間が個として形成される云々以前の原始的欲求である食欲を表す腹。

鉄冠子が指し示した器官に、それぞれ人間が保有する感情や欲求があるという考察が可能なことと、こうした状況を作り出した鉄冠子の思惑を重ね合わせると、理性を司る部位から本能を担う部位の方向へと移動することから、この金の埋まっている場所の移動は、鉄冠子による杜子春の「人間らし」さのゆるやかな崩壊を意味する侵食の象徴的表現に思われる。つまり一段階ごとに杜子春は、金というものに侵されていくのだといえる。人の形をした影の一部である該箇所を掘ることで、まず理性が破壊されて金が欲しくなり、次に強い抑制とまではないかなくとも、欲求の発動はよすがのいいかもしれないと感じるだけの主観も破壊され金が欲しくなり、未遂とはいえ満腹感の限界も破壊され原始的欲求さえも失って金が欲しくなるのであろう。

また、この金の埋まった場所の移動の順序からみて、もし四度目の恵みがあつたなら、それは脚であつたろうと想像される。そして人間が脚で二足歩行をすることで、その一段階手前の部位であった本能の食欲を表す腹を持つその他動物と一線を画していることを考え合わせると、杜子春は、感情という感情が欠如し人間の形をした塊になってなおも、人間の特許である二足歩行を行う脚すら失うことになっていくかもしれない。脚を掘って失うことは「人間らし」さから逸脱していくことに他ならないのではないだろうか。

以上のことより、大金が埋まっている場所を鉄冠子とその都度指示

し動かしている様子は、青二才の杜子春が、立ち直るきつかけも与えられないまま、鉄冠子による侵食を受けて、「人間らし」さから徐々に遠いところへ行ってしまうさまを暗に示しているのだと私は考えるのである。

さらに、こうして出会った当初から杜子春を駄目人間へと導いている鉄冠子であるが、それはこれら影の動きから象徴的に読み取れるばかりではない。そこに仙人としてこそその立場を絡ませてみるのである。「はじめに」にて少々触れたように、鉄冠子、なかでも特に鉄冠子のなす影の移動に言及する論はいくつかあるが、そこに仙人としての鉄冠子のあり方をみたものはない<sup>（注13）</sup>。鉄冠子はなぜ杜子春と影とを結びつけて考えたのか。

まず仙人と影は、仙人発祥の地中国では、道教において興味深い関係にあるようである。山田利明<sup>（注14）</sup>はその関係を次のように説明している。

仙人には影がないという。「日中無影」、つまり昼ひなか、太陽の下でも影ができないのである。これはしばしば仙人と人間を見分ける方法として、いくつかの文献に記されている。

これによると、鉄冠子に〈影〉は存在しないことになる。しかし、「杜子春」本文中には、「それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落とす」という一文がみえる。「それ」が指示するのは鉄冠子である。つまりこの表現によって、「杜子春」の仙人である鉄冠子が、本来持つはずのない〈影〉を持つていることが明らかになるのである。作者であ

る芥川が、仙人の影を持たないことを知らなかったか、あえて持たせたかのどちらかであろう。しかし、いずれにしても杜子春の〈影〉だけを問題視して象徴的意味づけをするのは不可能なことが分かる。〈影〉の有無から杜子春と鉄冠子の違いに結びつけて意味づけすることもできない。〈影〉そのものの意味を考えねばならないだろう。

さて、この〈影〉は太陽がなければできないことは明白である。また杜子春や鉄冠子がいなければできない。双方がいて初めてできるものである。そしてできあがった〈影〉のうち、鉄冠子は不思議と頭、胸、腹と限定して見事にその部分から大金を湧き出させている。しかし、考えてみれば、杜子春が地面のどの辺りに立ち、該当箇所がどの辺りに来るかなど鉄冠子の知るところではない。該当箇所を告げて、いよいよ杜子春が〈影〉を映してみている際には、その場に鉄冠子は立ち会っていないからである。一体鉄冠子はどのような仙術を用いて、杜子春の墮落を試みたのだろうか。本文には「老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往來にさしてゐる夕日の光を指さしながら」という記述がみえる。鉄冠子はこのように行動したあと、まず一度目の施しとして、大金が〈影〉の頭の部分にあることを告げるのである。よって「暫く何事か考へてゐる」内容は、この告げられた施しについてであると考えられよう。では、鉄冠子はいつその〈影〉から大金が溢れ出るように仕掛けをしたのか。本文中それに由来すると思われる鉄冠子の行動は、「往來にさしてゐる夕日の光を指さす手」の動きしか見当たらない。つまり、鉄冠子は自分の〈影〉を作り出し、

また杜子春の〈影〉を作り出してゐる夕日の光を指差すことによつて光に術を施し、杜子春の身体の該当箇所にあたると大金が出るように仕掛けたのであろう。地面のどの部分に該当箇所が来るか分からなくとも、〈影〉を作り出す夕日の光そのものに力がこもっていれば、そして頭、胸、腹に作用するようそのたびに念じていけば、確実に杜子春に大金をもたらすことができる。鉄冠子は、その自らの力を用いて、杜子春が浴びる夕日の光を杜子春の物欲を刺激させる効果を持つ光に変質させてしまったのである。

では、夕日の光によつてできる杜子春の〈影〉と、本来なら存在しないはずの鉄冠子の〈影〉が持つ意味とは何か。

まず、鉄冠子の仙術の影響を受けずにあつた夕日の光でできた杜子春のもともとの〈影〉が持つ意味は、杜子春に求められる「人間らし」さに他ならないと思われる。なぜなら、先の連続した①、②、③の引用から明らかなように〈影〉を掘ることで、杜子春に対する侵食が成立しているためである。ゆえに、侵食される以前の何ひとつ傷のない〈影〉が、杜子春にとっては重要な意味を持つものであるといえるのである。だが鉄冠子は、最終的には「人間らしい」生活を決心したようにもみえる杜子春を初めから信用していない。そしてそんな鉄冠子が、夕日の光を対象者が持つべき何かを指摘する光から、そのこぼれ落ちてゐる何かを刺激する光に変質させたことで、〈影〉は一定の部分から大金が出て来るように細工をされてしまったのだ。そのため、鉄冠子の仙術には炙り出された対象者の死守すべき「人間らし」さを壊す力

を光に宿す効果があつたと考えられる。杜子春の場合、身体からこぼれ落ちて〈影〉となり、死守すべきは乱費癖を押し止める強い意志であつただろうが、その意志も鉄冠子に施しを受けるたびに杜子春には縁遠いものになつてゐる。

では鉄冠子の〈影〉は何を意味するのか。鉄冠子も守るべき何もものを刺激される光を浴びている。鉄冠子の「人間らし」さも炙り出されてゐるのか。だが、もとより仙人の鉄冠子に「人間らし」さはない。仙人は人を超えた存在である。つまりいずれの〈影〉も「人間らし」さの意味するものの、それはそれぞれの存在から欠如し、本来持つてゐることを望まれる「人間らし」さであり、夕日は、光を注ぐことにより、地上へふたりに足りないものを炙り出しているのだといえる。

鉄冠子はその光に術をかけて、杜子春に物欲を發揮させるよう働きかけた。鉄冠子自身は「人間らし」さのなさを指摘され、加えて毒の夕日の光にその「人間らし」さを刺激されたところで、昇仙を果した存在であるのだから何ほどのこともない。しかし、杜子春は違う。杜子春は曲がりなりにも人間である。だからこそ、もともと青二才であつたために備えられなかつた「人間らし」さのなさを指摘され明らかにされ、それだけではなく〈影〉という形をした足りない何かを刺激するように変化した光の影響で侵食されてしまうのは、杜子春にとって危機といえよう。保持すべき「人間らし」さを掘り崩されてしまふことで、杜子春の「人間らし」さは形すら失つて二度と返つて来なくなるのだといえるのではないだろうか。

今、人間の〈影〉の形をした杜子春の意志は、理性と主観の部分が削られ、食欲の部分は物欲に染められ、まさに「人間らしい」形状を保てなくなりかけているのである。

本来であれば人間しか持たないはずの〈影〉を人間、仙人ともに有しながら、一方は徹底的に傷つけられ他方は無傷であるのは、鉄冠子の絶対者としての優位性を強烈に印象づけはしまいか。この意味で、芥川はあえて鉄冠子に〈影〉を与えたという予測が許されるだろう。

以上、「三」では、作中に登場する〈影〉などの表現と鉄冠子の仙術との関連性や、〈影〉に込められた意味を見出した。その結果、まず〈影〉のなかで金が埋まっている場所を鉄冠子が動かす様子は、そのまま鉄冠子の恵みによつて杜子春が墮落していく様子を暗示していると読んだ。また、杜子春の危機が示されているこの〈影〉は、もともとはそのものに本来備わっているべき「人間らし」さの意味するとも説めた。だが、鉄冠子が夕日の光を仙術によつて対象者に足りないものを示唆する光から、そのものを刺激する光へ変質させてしまつた結果できた〈影〉と考えられるので、結局杜子春の危機を表す〈影〉に変わつてしまつたのだと結論づけた。

## おわりに

ここまで考察を進めてきたように、自身の言葉が矛盾するがゆえにその善心の存在が疑わしかった鉄冠子は、その実貧窮に追い込まれた

哀れな杜子春を救うために現れたわけではなかった。むしろ、鉄冠子の目的はその逆であり、杜子春をさらに感心しない人間にするために現れたのである。

それは、ふたりの別れの場面に表れているといえる。「人間らしい」生活を決心したかにみえる杜子春に対して、家と畑を与えることを伝えて水を差すような発言をするのである。しかもその発言は、「さも愉快さうに」なされていることから、鉄冠子の気まぐれのもとにされたものであったと判断できる。それ以前の鉄冠子の表情から考えてみても、鉄冠子が内心に抱えているのは杜子春という人物に対する不信任感や、杜子春をみていることで生まれる好ましくない遊び心であった。いわば、鉄冠子の行動のすべては、仙人という超越者だからこそ持ちうる強者の余裕に由来するものといえるだろう。杜子春が改心するかもしれないかという重要課題も、鉄冠子にとってはいつそ二の次なのではあるまいかとすら思われる。杜子春が自分との出会いを契機として人生を全うに生きようが、踏み誤ろうが、自分さえ楽しければそれでよいのである。ただ、その楽しみを持続させるためには杜子春が墮落し続けることが必要となってくるので、杜子春が自分の仙術によって駄目な人間になり続ける方が、鉄冠子にとっては嬉しい事態といえるだろう。ゆえに、鉄冠子という人物は、杜子春からみれば杜子春が自覚していないにしろ、杜子春の前に立ちはだかつて杜子春が更生することを妨げる壁のような存在なのである。

泰山の麓の家で、杜子春が安閑と暮らしてゆけるならそれに越した

ことはない。死んだ母親の声が杜子春を覚醒させたのであれば、なお美しい。ただ、そうした場面から一気に「倫理的な美しさ」を読み取ってしまうには、あまりに気にかかると表現が「杜子春」には溢れている。童話であるから道徳的に読まねばならない、という束縛は必要ないだろう。子どもに残酷な結果をみせてはならない、という決まりもない。現に、例えば「蜘蛛の糸」では物語全体の解釈はさまざまに考えられるにしても、カンタタが無残にも地獄へ落ちていったことは疑いない。だがそれを誰に責められることもなく、「蜘蛛の糸」は現代にも名作として存在する。何かを美しく説くだけが童話ではないだろう。

芥川は、「蜘蛛の糸」のお釈迦様や「杜子春」の鉄冠子に限らず、童話では超人的な立場であったり力を持ったりする非現実的な異常性のある登場人物を好んで描いている。それは、その他の『赤い鳥』掲載作である三匹の不思議な犬を主人公に授けた「犬と笛」の神々、催眠術で主人公の欲を暴いてみせた「魔術」のミスラ君、憑代に入り込んで占者を簡単に殺してしまう「アケニの神」の神など次々挙げられることから容易に理解できる事実であり、同時に作品内で幾度となくこうした超越者を利用するということは、芥川がその超越者の存在をそれだけ素材として重視していることの証左ともいえよう。そして「杜子春」では、この作品における超越者である鉄冠子に密かに多くの残酷な表現が装着されることになった。それは超越者を好んだ芥川ゆえの、絶対的強者として鉄冠子を描くための演出であつたらうし、「愉

快さう」な笑みを浮かべた鉄冠子はその課題を確かに通過してみせている。そんな登場人物とただ人の杜子春が対峙させられたとあつては、杜子春の非更生の可能性を過分に感じる物語のその後が用意されていると読むのが、穏当な方向とはいえないだろうか。

注1 「Ⅱ 作品の世界 4 杜子春」 『芥川龍之介と児童文学』

二〇〇〇年一月 久山社

2 「鑑賞」 『近代文学鑑賞講座第11巻 芥川龍之介』一九五八年六月 角川書店

3 「芥川龍之介と児童文学」 『資料と研究』一九九六年三月

山梨県立文学館

4 児玉晴子（『杜子春』を教材化して） 『広島女子大国文』一九九四年九月）は、『杜子春』を教材として選択した理由に「人間の可能性・可変性を力強く描いている」点など四項目を挙げている。

5 「指標としての『赤い鳥』——『杜子春』の評価をめぐる——」

『中央大学国文』二〇〇一年三月

6 真杉秀樹「挑発する仙人——『杜子春』」 『芥川龍之介のナラト

ロジー』一九九七年六月 沖積舎

7 松村明編『大辞林 第二版』一九九五年一月 三省堂

8 注7に同じ。

9 注7に同じ。

10 「『杜子春』をめぐる諸問題」 『鶴見日本文学』二〇〇〇年三月

11 「芥川の川ほとり（八）」 『芥川龍之介全集第八卷月報8』一九九六年六月 岩波書店

12 「『杜子春』を読むための覚書——芥川龍之介と近代的家族観をめぐる考察——」 『広島商船高等学校紀要』二〇〇二年三月

13 注6の真杉は、影の移動を杜子春が鉄冠子に影を「売り渡す」行為と読み、荻原雄一（『杜子春』について——もう一つのエゴイズムをどう教えるか——） 『文学の危機』一九八五年一月 高文堂出版）は鉄冠子が杜子春を「見捨てる」行為と読み、高橋龍夫（『杜子春』の物語性） 『解釈』一九九九年二月）は杜子春の「死が予兆されている」と読むに留まり、仙人独特の影との関わりはみられていない。

14 『シリーズ道教の世界2 道法変遷 歴史と教理』二〇〇二年八月 春秋社

テキストは岩波書店版『芥川龍之介全集第六卷』（一九九六年四月）に拠った。

（やまわき かな／平成一七年度博士前期課程修了）